# 誰かこの状況を説明してください！10

～契約から始まったふたりのその後～


バイオレット
ヴィオラとサーシスの娘。愛称はレティ。皆の愛情を受けてすくすくと成長中！
サーシス
超名門貴族・フィサリス公爵家当主。ヴィオラと同じく娘のバイオレットにメロメロ。
ヴィオラ
元貧乏伯爵家令嬢で、フィサリス公爵家の若奥様。二人目の懐妊がわかり、祝福に包まれながら静養中。
登場人物紹介


デイジー
ベリスとミモザの娘。明るい性格はミモザ似!?
アイリス
サングイネア侯爵家令嬢。ヴィオラの友人。婚活に終止符!?
ティンクトリウス
カルタムとダリアの息子。ステラリアの弟。王宮の料理人を辞めてお屋敷勤務を希望!?
ユリダリス
ブルケリマ侯爵家の三男。愛する人との挙式がついに!!
ステラリア
カルタムとダリアの娘。ヴィオラ付きの侍女。ユリダリスとの進展が!?

# 目次

本編
「誰かこの状況を説明してください！
～契約から始まったふたりのその後～」10
6

# プロローグ

しがない貧乏伯爵家の娘だった私こと、ヴィオラ・マンジェリカ・ユーフォルビアが、どういう神様のいたずらか超名門貴族のフィサリス公爵家に嫁ぐことになり、あっという間に数年が経ちました。

その間に色々とありました。

まあ、端的に言って旦那様が改心したり、その旦那様にいつの間にか溺愛されてたり、ついには天使のようにかわいい娘が誕生したり。人生大逆転と言っても過言ではないくらい、地味〜に暮らしていた娘時代とは一変した生活を送っています。

しか〜し！　超名門・超お金持ち貴族の奥様になったからって、ふんぞり返ってるわけじゃないですよ！　今でも〝ちゃんと〟家事はやってるんです。厨房に行っては料理長と一緒に晩餐のメニューを考えたり、庭園に行っては雑草抜きから花壇の手入れもやってます。掃除？　もちろんやってるに決まってるじゃないですか。ユーフォルビア流の掃除術まで導入したんですよ。

でも、娘のバイオレットが誕生してからは、また生活が一変しました。

慣れない育児――と言いたいところですが私の場合、自分の弟妹で慣れているので困ることはほぼありません。それでもわからないところや手が足りないところは、使用人さんたちの手を借りて、楽しく新米母ライフを送っています。育児ついでに『お屋敷引きこもり生活』が戻ってきたのが嬉

しい誤算です。
誤算と言ってはなんですが、驚くことに旦那様が一番バイオレットにメロメロになっています。
親バカを通り越してバカ親の域に……っと、それは私も一緒だわ。
だってかわいすぎるんですもの！

そんなこんなでフィサリス家でも快適に過ごしていたんですが、つい最近、なんと二度目の懐妊が発覚しまして。

穏やかに新年を迎えた直後の慶事に、旦那様もお屋敷のみんなもそれはそれは大喜びしましたよ。
バイオレットの時は初めてということで不安になったりすることもあったけど、今度はどうでしょうか？
二度目のマタニティライフ、ドキドキハラハラもあるけど、早く新しい赤ちゃんに会いたい気持ちが大きいですね！

## 一・おうちでゆっくり

バイオレットの風邪をもらって体調不良と思いきや、実は二度目の懐妊だったということがわかってからというもの、旦那様と使用人さんたちの過保護モードが爆発中です。

まだバイオレットの時のようなつわりを感じてはいないのですが、カルタムの胃に優しく栄養たっぷりのお食事で調子は良好。ベリスが用意してくれる綺麗なお花の香りでリラックス。上げ膳据え膳は当たり前、いつも以上に至れり尽くせりの王様のような生活は、貧乏性が抜けきらない私にとっては逆に心苦しすぎます。

「早く元気にならなくちゃ！」

「懐妊は病気じゃないよ」

旦那様や使用人さんたちの過保護シフトのおかげで、順調に懐妊生活をスタートさせています。

仕事に向かう旦那様を送り出して一番に向かったのは、使用人さん用ダイニングでした。いつ来てもここってほんとに居心地よくて、ホームに帰ってきた感じがします。厨房ではカルタムが、今日の食事に使う食材をチェックしていました。

「心配かけてごめんなさいね。カルタムの美味しいご飯ですっかり元気になりました！」

「おぉ……顔色もいつも通りに戻りましたね。よかったよかった」

「数日とはいえあまり動かなかったから、むしろ太ったかも」

「それは元気になった証拠ですよ」

「確かに」

「マダ～ムに内緒で、消化にいいものから、徐々に栄養がつくものにシフトしていきましたから

ね」
「え、そんな細かい計算されてたの⁉」
「もちろん！　だから頬も健康的な薔薇色に戻ってますよ～」
ドヤ顔で華麗にウィンクをキメるカルタム。言われてみれば、最初は喉越しのいい〝だけ〟のものだったけど、少しずつ体に負担のない範囲で食材が増えていったっけ。回復具合に合わせてしれっと料理をシフトアップさせてたなんて。さすがうちの自慢の料理長ですね。
「カルタムったら、旦那様にお出しする料理よりも、奥様のお食事の方を優先させていたんですよ」
「おっと、リアちゃん。それはバラさないでほしかったなぁ。ははは！」
ステラリアの暴露に明るく笑ってるカルタムだけど、待って、そこは旦那様を優先しないといけないよね？　ああもう。使用人さんたちにまで甘やかされてるわ、私。ん？　今に始まったことじゃないって？　確かに。

回復したとはいえ過保護シフトは続いているようで、いつものお仕事は任せてもらえません。
「お掃除は体力を使いますから、まだ先にしましょう」
要約：フラフラ動き回るな。
「お庭の手入れはベリスがきっちりやっていますから、ご心配には及びませんよ」
要約：外に出るな。
あれもダメこれもダメ、ただただ美味しいもの食べて心身ともに静養を……て、むしろ動かなさ

すぎておかしくなっちゃう。
「今回はつわりもなくて元気なのに」
「そうはおっしゃられますが、まだ安心はできませんから」
「私からお仕事を取ったら何が残るの」
「たくさん残ります」
「い〜え、そんなことはありません！　お掃除がしたい、庭いじりがしたいっ‼　ほら、適度な運動はお腹にもいいと思うのよ？」
　ほらほら、私がお掃除しないと超高級窓ガラスが曇りますよ？　廊下の隅に埃が溜まっちゃいますよ？　――なんてことはうちの使用人さんに限って絶対にあり得ないから言えないけどさ。
　どうやって〝私の日常〟（？）を取り戻そうか。恨めしげにロータスを見ていたら。
「運動といえば。もちろん社交はお休みでいいですよ」
「えっ⁉」
「お体を大事にする時期でございますから」
「おっ、大人しくしておきますわ！　おほほほほ」
　堂々と社交しなくていいなんて！　ロータス様様！　引きこもり奥様生活、再びですね。
「〇〇家・△△家での夜会のご招待が来ていますが、まだご懐妊を公表する時期ではございませんので、何か口実をつけてお断りしておきます」
「ワァ、ザンネンダナァ」
「棒読みですよ」

お屋敷中を動き回るのだけが私のお仕事じゃないもんね。そうだ、久しぶりに刺繍に没頭してみようかしら。バイオレットのドレスを縫うのもいいですね。せっかくだから深窓の奥様ごっこを楽しんでみよ～っと。

引きこもり――もとい、深窓の奥様ごっこは楽しくて、お屋敷の居心地の良さを改めて思い知らされています。

「レティにはまだ針は危ないから、ビーズ貼り係さんね」

「は～い」

バイオレットと一緒にお裁縫の時間には、色とりどりのガラスビーズを糊で布に貼っつけてもらいます。今日の作品は、旦那様の部屋に飾るタペストリー。特にデザインは考えておらず、あえてバイオレットの好きなように配置してもらっているので、でたらめだけどかえってそれがモザイク画のようで斬新で素敵です。

「これは何？」

「おはなと、とりしゃんです」

言われてみれば暖色のビーズを花の形に配置してますね。鳥も、それっぽい感じになってるかな。

「――ん？　この黒いのは？」

草原のような緑のビーズの中に黒い丸っこいものが……。まさか、ね？

「クマしゃんです！」
「おう……」
そうきたか。
ま、まあ。とにかく自由に楽しく配置してるからよしとしましょう。しかし、どれもそれっぽく見えるから、うちのお嬢様は芸術的センスがあるのかも？　すみません、親バカ爆発してしまいました。
「モノトーンの部屋が明るくなるね。出来上がりが楽しみだ」
作業の様子を見た旦那様も喜んでくれています。
「でしょう？」
「ああ。あまりに芸術的すぎて、王宮の大神殿に飾らせてくれと言われたらどうしよう」
「それは困りますね！　どうしましょう、家宝にします？」
「もちろんでしょ」
親バカ、増殖中です。

「クッションカバーはほぼ一新したし、レティのドレスもたくさん縫えたし、大満足！」
バイオレットといっぱい遊んで、食べて、寝て。何この幸せ～！　あ、もちろん〝お仕事〟も忘れてませんよ。お屋敷中の食器、カトラリー、傷ひとつなくピッカピカにしてやりました。磨き上

げてやりました！

そんな満足の高笑いをしている今日この頃。このまま社交のない、平和な日々が続くといいのになぁ……なんて幻想を抱いている私に、現実がやってまいりました。

「アルゲンテア家からお茶会のお誘いが来ておりますが、いかがいたしましょう？」

ロータスが招待状を持ってきました。

「お茶会は社交に含まれるのでは？」

「そうでございますが、アルゲンテア家のお嬢様とは懇意にされておられますので。まあ、そうは言っても体調次第でございますね」

脊髄反射的に拒否った感じになっちゃいましたが、確かにロータスの言うように、バーベナ様はいつも良くしてくださるので行った方がいいに違いないんだけど……。引きこもりに慣れてしまった身としては、もはやお出かけがめんどくさくなっちゃってるのが本音。バーベナ様、ごめんなさい！

「むむぅ……。行かないといけないのは頭では重々承知してるんだけど、できれば断りたいんだけどな～。今はあんまり行きたくないんだけどな～」

らしくなく、ウジウジと悩んでます。

「まだ日がございますので、じっくりお考えください――あ、少し失礼します」

「はぁい」

ロータスが使用人さんに呼ばれて席を外したので、その間に考えておきましょうか。お茶会……。他でもないバーベナ様からのお誘いだし？　断るのは心苦しいし？　断る口実、なんかいいのない

かなぁ。って、もう〝行かない気〟満々じゃないですか、私。
実は懐妊中で……は、まだ使えないしね。じゃあ、私じゃなくバイオレットの不調？　――うん、これは逆に見舞いだのなんだので大騒ぎになる未来が見えてる。
お茶会を断るもっともらしい口実――。
「義父母様たちが来るからその準備で忙しい、とか？　……な～んて、嘘バレバレか」
必死に口実を探しているところにロータスが戻ってきました。
「いえ。現実になりそうでございますよ」
「はい？」
「たった今ピエドラのご領地から連絡がございまして、大旦那様たちが近々こちらに来られるということでございます」
「うそん」
なんてこった。嘘から出たまことになっちゃった。いや、お義父様たちはめちゃくちゃいい方たちなので、来てもらうことは全然問題ないですよ。
「どうやらアルゲンテア家のお茶会の日程と近いようでございます」
「そっかぁ……じゃあ、今回お茶会はパスさせてもらいましょ」
嘘でもなんでもなく断る口実できました。ラッキー。
「お茶会をパスされるのは結構ですが、お迎え準備に走り回るのはご遠慮ください」
「……はい」
やっぱり過保護モードは健在でした。

## 二・私のヒーロー

バーベナ様からのお茶会断る口実を考えていたら、なんともタイミングよく義父母様たちの訪問予告がきました。

「そういえば、お義父様たちには私のこと伝えてあるの？」

「いいえ。こちらに来られてから、折を見て旦那様が伝えるとおっしゃっておりました」

「わかりました」

だ　か　ら、使用人さんと一緒になってお迎えの準備に張り切って……はしなくていいですよと釘を刺されました。本当、うちの使用人さんたちは私のことをよ～く理解していらっしゃる。

「早速別棟を整えておきましょうか。もちろん私は見てるだけにするわよ」

「かしこまりました」

私もたまに使うので掃除は行き届いていますが、念には念を入れてさらにピカピカに磨いておきましょう。

バタバタと義父母様たちをお迎えする準備をしていると、あっという間にその日はやってきまし

た。
「またお邪魔するよ」
「レティはまた大きくなったわね！　ヴィーちゃんには好物の果物や野菜をた〜くさん持ってきたから、いっぱい食べて！」
　二人はそう言って、たくさんの果物や野菜をお土産に持ってきてくれました。どれもこれもピエドラ特産の、王都ではなかなか手に入らないものばかりです。そうそう、この星型のフルーツ！　これ私、大好きなんですよね。
「こんなにたくさん！　ありがとうございます」
「いえいえどういたしまして。いつも通り私たちは勝手にするから気を使わないでね」
「はい」
　いつものことですけどね。お義父様たちは滅多に王都に来ないから、いらっしゃった時はいつもお茶会やなんやかんやであちこち引っ張りだこですもん。

　お土産の野菜や果物を贅沢に使った晩餐を終えてくつろいでいるところに、早速王宮からお手紙が来ました。もちろんお義父様とお義母様宛て。そこにめちゃくちゃホッとしているのは内緒。
「もうきたか〜」
「空気読んで、もっとあとでもいいのに」
　なんて二人ともブツブツと言いながらお手紙を開けています。めんどくさい気持ち、よ〜くわかりますよ！　まあ今回のは他人事なので、穏やかな気持ちでお二人を見ていたんですが。

「あら」
そう言うとお義母様とバッチリ目が合いました。
「？」
「王妃様とのお茶会、ヴィーちゃんもぜひ一緒にって」
「まあ！」
そうきたか。幼馴染み同士の気楽なお茶会にしておけばいいのに……なんて思っても言えないや。
「当日は姫君たちも参加するから、ヴィーちゃんもどうぞですって」
これは完璧に『断れない系』のお誘いじゃないですか。行くしかないやつ。でも、どうしよう。一人では決めかねます。
助けてロータス！　これはどうしたもんですか？
どう答えたものか迷ってロータスを見たら……珍しく答えに困っているようでした。じゃあダリアは？　……って、ダリアも同じリアクションです。これは少し考えさせてもらった方が良さそうですね。
「実は最近、体調を崩しまして。回復はしたんですが、まだちょっと体力に自信がないんです。サーシス様と相談させていただいてもよろしいですか？」
「あらやだそうだったの？　なら、無理はしないでね」

「はい。ありがとうございます」
とりあえず、いったん保留になりました。

「――ということで、王妃様からのご招待を受けるかどうか、迷ってるところなんです」
旦那様が帰ってきてから、ロータスたちも交えた会議が始まりました。お題はもちろん『王宮に行くか、行かないか』です。
「行かない方がいいとは思うけど、体調不良を理由にするとうるさそうだしなあ」
「幸い、今は普通に過ごせていますから、一日だけならなんとかなりそうです」
「大丈夫かなぁ」
「懐妊のことを話せばすぐに帰してくれますよ、きっと」
「そうか……父上たちには今からでも懐妊のことを伝えて、当日は母上にフォローしてもらおう」
「はい」
サクッと王宮に行って事情を説明したら、事を大きくしなくて済むでしょう。まだ秘密にしておいてくださいねっていうのも言いやすいでしょうし。
ということで、王妃様からのご招待は受けることにしました。

お茶会当日。義父母様たちと一緒に馬車に乗り込んだらいざ王宮です。
「まさか今回、こんな嬉しい報告が待ってたなんて想像もしなかったなぁ」
「レティちゃんだけじゃなく、また天使が増えるんでしょ。もう、嬉しいったらありゃしないわ！　ヴィーちゃん、体調は大丈夫？　辛くない？」
「はい、大丈夫です」
旦那様から話を聞いた二人は大喜びしてくれましたが、まだ安定期ではないということを知って、無理はさせない・ちゃんと守ると約束してくださいました。ですので、私も安心してお出かけに同行できました。
今朝も、特に変わりなかったので、至ってフツーにお支度して出かけてきたんですが、馬車に乗ってしばらくした頃から、なーんか嫌な感じがしはじめてるんですよね。微妙にグルグルする視界と、ムカムカする胃のあたり。この感じ……馬車酔い……と言いたいところだけど、心当たりがありすぎる。
まさか、今日に限ってつわりがきた？
今まであんなに調子良かったのに？　嘘でしょ。
気付かれないようにゆっくり深呼吸してみたりするんだけど、治まる気配がありません。こんな体調じゃあお茶会を乗り切れる気がしない……。やっぱり気分が悪いのでお屋敷に帰らせてもらお

うかな――。

って、もう王宮の門をくぐっちゃったじゃないですか。

「姫君たちもヴィーちゃんと会えるのを楽しみにしてるんですって」

さっき『大丈夫です』なんて言っちゃった手前、帰りたいなんて言い出せない。

お義母様の話に引き攣らないよう気をつけて微笑み返すのが精一杯です。幸いお義母様たちには、体調の急変がバレてない様子。よし、頑張れ、私！　馬車を降りたらお義母様に耳打ちして、早めに切り上げてもらえるようにお願いしよう。

エントランスには侍従や女官を従えた王妃様や姫君たちが、わざわざお出迎えに来てくれていました。さすが義両親。

いつもならここでバッチリ気後れするんだけど、今の私は気持ち悪すぎてそれどころではないのです。無事に着いたことにホッとしてボーッとしてしまい、気が付いた時にはお義母様は馬車から降りていくところでした。

ちょ、待って！　早くお義母様にこのことを伝えなくては。

「あの……お義母様――」

椅子から立ち上がった途端に視界がぐにゃりと歪みました。

え？　何⁉

強烈な眩暈が襲ってきてふらついた拍子にそのまま外に出てしまったようで、踏ん張ろうとして出した足は空を切り、ふわっと体が浮く感覚がありました。あれ、足置きどこ行った？　……じゃないですね。めっちゃ踏み外してるじゃないですか。

うわぁ、落ちる！　このままだと地面に激突する‼

「きゃー‼」

「ヴィーちゃん⁉」

「どうした！」

周りの人たちの悲鳴が聞こえてきます。そりゃ馬車から人が落ちてきたら驚きますよねー。って、そんなツッコミしてる場合じゃない。

体術のお稽古で習った受け身を取るのがベスト。瞬時にそう判断して体勢だけでも整えようとした時でした。

「ヴィー‼」

聞き慣れた、安心する声。そっか、ここは王宮。旦那様の仕事場だ。

旦那様の声が聞こえたと同時に体がぐいっと引き寄せられました。そのまま抱き上げられた感じ



がするので、どうやら地面激突は回避されたようです。

ああ、旦那様。貴方はいつも私のピンチに駆けつけてくれるんですね。

それだけ思うと、私の意識は暗転しました。

## 三・わかったこと

「ヴィー……」

名前を呼ばれたような気がして、意識が浮上しました。

私はお義父様たちと一緒に王宮に来たんだったよね。それで……あ、そっか。私、めちゃくちゃ気持ち悪くなって眩暈して、降り際に馬車から転げ落ちたのははっきり覚えてる。あの時、旦那様の声が聞こえて、そして抱き上げられた感じがしたんだっけ。体のどこにも痛みはないから、助かったのかな。でも、お仕事に出かけたはずの旦那様が、なんであの場にいたのかしら？　私の名前を呼んだのは、確かに旦那様の声だったと思う、たぶん。あ、そっか、仕事場は王宮の中だから、あの場にいてもおかしくないか。

あれ？　今、私を呼んだのは旦那様ではなく女の人だった気がするぞ？

ここでようやく意識がはっきりし、ハッと目が覚めました。しかし見えたのは見知らぬ天井。ココハドコ？　どこかに寝かされてるのはわかったけど……お屋敷のベッドとはなんか違うんですよね。いや、そもそも天井が見たことないって言ってんでしょ。前にもこんなことがあった気もしないではないけど（遠い目）。

まだぼんやりする頭で『？』ばかりを先行させていると。

「ヴィーちゃん！　目が覚めたみたいね」

今度ははっきりと女の人の声――お義母様の声が聞こえました。そっか、さっきのはお義母様だったのか。

「すみません、急に体調が悪くなってしまって……」

「ごめんねごめんね、気付いてあげられなくて。サーシスが抱き止めてくれたから大事には至らなかったけど……」

そう言うお義母様の美しい瞳（ひとみ）からは大粒の涙がポロポロと溢（こぼ）れています。うわぁ、泣かせてしまった。

「気分が悪くなったのをお伝えするのが遅くなってしまって。私こそすみませんでした」

「ヴィーちゃんは謝らないで。――はぁ、無事に目を覚ましてくれてホッとしたわ」

そう言うとお義母様は涙を拭（ぬぐ）っていました。

そして、やっぱり意識が途切れる前に聞いたのは旦那様の声だったようです。本当にうちの旦那様は、いつも私のピンチに駆けつけてくれますね！　……てゆーか、なんで駆けつけられたのかが疑問なんだけど。

「あ、サーシスね。ヴィーちゃんが王宮に着いたことを聞きつけたディアンツ殿下が、お稽古を脱走したのを追いかけてきて、ちょうどあの場に出会したのよ」

お義母様が倒れた時のことを教えてくれました。なるほど、そういうわけであの場に旦那様がいたんですか。

「すごい勢いで飛び込んできたもんだから、周りの人が何人かぶっ飛んじゃってたわ」

「わぁ」

その人たちの手当ては大丈夫でしょうか？　私のせいで……なんかごめんなさい。

「では……ここは？」

「王宮の客間よ。落ち着くまでどうぞって王妃様が空けてくれたの。ヴィーちゃんの目が覚めたことだし、医師様を呼んできましょうね」

「ありがとうございます。あの……サーシス様は？」

部屋中見渡しても旦那様の姿が見当たりません。いつもなら絶対側にいるはずなのに。いるのはお義母様と、数人の女官さんたちだけです。

「いったん職場に戻った……というか、戻したわ。ここにいても役立たずだし」

役立たずて。お義母様のドきっぱりな物言いに噴き出しそうになりました。

呼ばれてきた王宮付きの医師様に診てもらいましたが特に問題もなかったので、私はお屋敷に帰ることになりました。お茶会にはお義母様だけ出てもらい、早退する旦那様と一緒に帰宅です。私ってば何しに王宮まで来たんだか。とほほ。

王宮では問題なしと診断されましたが、そこはうちの仕事の早い使用人さんたち、帰宅するといつもの医師様と、奥様であるおばあちゃん医師様がすでに待機していました。

「やはりかかりつけの医師様に診てもらうのが一番でございます」

「もちろんだ」

ロータスの説明に旦那様も頷いています。誤解のないよう言っておきますが、決して王宮付きの医師様を信用してないとかじゃないですからね！

医師様・おばあちゃん医師様ともに、やはり問題ないということでした。

「また厳重に安静だね」

「もうすでに過保護シフトなのに、これ以上は勘弁してください。少しは動かないと」

「う～ん……でもまた今回みたいなことになったら……」

「これ以上絶対安静とか、ただの寝たきりになっちゃうじゃないですか！　そんな重病人じゃあるまいし」

「まあ、確かに」
　自分の過保護さを自覚したのか、旦那様が笑っています。
「しかし……あの時、あの場に自分がいなかったらどうなってたのかと思うと、冷や汗が止まらなかったよ」
　もしあの時旦那様がいなかったら……馬車から落ちていたのは確定かな。ひょっとしたら侍従の方が助けてくれたかもしれないけど、旦那様ほど必死になってくれたかはわからないですからね。
　そしたら、私の怪我云々どころか、お腹の赤ちゃんまでも……。ほんっっっとに旦那様、神懸かり的なタイミングでの登場でしたね！
「王太子様を追いかけてきたんでしたっけ。お義母様から聞きました」
「そう。本当あのガキンチョときたら……ヴィーが王宮に来るって聞いてたから、タイミングを見計らって茶会に乱入するつもりだったみたいでさ。茶会には早かったから、出迎えに行ったらしい」
「おぉ……」
　王太子様ならやりかねないね。
「ちょうど僕が近くに居合わせたんで追いかけて行ったんだ。そしたらヴィーがふらついたのが見えて。慌てて周りをかき分けて飛び込んだよ。ほんと、間に合ってよかった」
「〝かき分けて〟ではなく〝吹っ飛ばして〟とお聞きしましたが？」
「え～？　そうだったかな～？　まあ、邪魔なのは退けたかな？」
「邪魔て」

「無我夢中だったから忘れた。それより、今回ばかりは殿下に感謝しようか」
「そうですね。仲良くしてください」
「それは無理」
そんなにきっぱり即答しないでください。

## 四・場所が悪かった

王宮から帰ってきた義父母様たちにも、私の体調はすぐさま伝えられました。
「ヴィーちゃんが倒れた時にはどうなることかと、目の前が真っ暗になっちゃったわ」
「なんとか無事でよかった」
「ヴィーちゃん、もう起きていて大丈夫？　辛くない？」
「今は大丈夫です」
報告のために起きていた私を気遣ってくれるお義母様。
「辛くなったらいつでも横になっていいのよ」
「ありがとうございます」
お気持ちはありがたく受け取っておきます。
「あれから王宮でもみんな心配して大騒ぎだったからなぁ。陛下といい、宰相（さいしょう）といい」
「倒れた場所が悪かったですね。お茶会の席ならともかく、出迎えもたくさんいた中でしたから」

旦那様の言う通り、侍従の方や女官さんたちもたくさんいる中でぶっ倒れ、運ばれていったんですもんね。もちろん、運ばれている途中にも、どなたかと遭遇している可能性はなきにしもあらず。

「侍医から〝特に何もない〟と診断されちゃったから余計にねぇ。ただの疲れじゃないかしらって誤魔化してはきたけど……」

「ヴィオラはどこでも人気者だから、大事になりかねないな」

「私も、それが心配なのよね。懐妊といえども、まだ不安定な時期だから公表は控えたいし」

「そうです」

お義母様が心配するように、しっかりはっきりお腹が大きくなるくらいまでは不安定な時期が続きますからね。

「懐妊を公表するまで、どう凌ぐか考えておかないといけませんね」

「ああ、そうだな。体調不良……は、不安を煽るだけか」

「そうね。う〜ん……もっと軽くて、でも原因がはっきりしてる感じがいいわ」

「無難に『風邪』かな」

「ええ、いいと思いますわ」

「では、しばらくは『風邪で体調を崩した』ということで押し通しましょう」

旦那様と義父母様たちの会議により、懐妊を公表するまでの間、私の倒れた原因は『風邪による体調不良』ということになりました。

懐妊とわかってからしばらくはなんともなかったのに、やっぱりまた始まりました。厄介なつわりが。体調が悪くて仕方がありません。眩暈に吐き気……ああもう、どうしろと！

「わかっちゃいるけど、ツライものはツライ」

「今はゆっくりなさいませ」

「ありがとう～」

侍女さんたちに促され、大人しくベッドに横になりました。

バイオレットの相手はミモザとデイジーが引き受けてくれるし、もちろん掃除洗濯なんてもっての外。そもそもやらなくていいことだけど――というのは置いといて、ただただ休むだけなんてつまんないんだけど。

「奥様、王妃様からお見舞いが届いております」

そう言ってダリアと侍女さんが運んできてくれたのは、立派な花束と、果物が山盛りにされた籠。

「王妃様から？」

「はい」

「お義母様、今日も王妃様に呼ばれて王宮に行ってるんじゃなかった？」

「ええ、そうでございます」

「じゃあなんで？」

今日もお呼び出しが来て、義父母様たちは朝から王宮にお出かけしています。きっと昨日のことを聞かれてると思うので、昨日の会議で決めた『ただの風邪』だって伝えてくれているはずだよ

ね？

「それは奥様のご体調を心配されてのことでしょう」

「ありがたいことだけど……本当のことをお伝えしていないのが心苦しいわ」

ただの風邪なのに（いや違うけど）。なんかかたじけない。

しかし、お見舞いは王妃様だけでは終わりませんでした。

「姫君方、バーベナ様、アイリス様、サティ様、ピーアニー様、アマランス様……その他いろんなお貴族様――」

ドンドコドンドコ運ばれてくるお見舞いの数々！　お花やお菓子、その他もろもろ。あ、久しぶりにシャケクマ発見。いつの間にか木彫りからぬいぐるみに進化してるじゃないですか！　これはバイオレットが喜びそうだわ――じゃなくて。

たかが風邪だって伝わってるはずだよね？　なのに何この大量のお見舞いたちは！

「ここだけでお花屋さんできちゃうくらいの量だよね」

綺麗に生けられて飾られていく花束を見ているだけでため息が出ちゃいます。ロージア中の花がここに集まってんじゃね？　……まさかね。

結婚の時もそうでした。そしてバイオレット誕生の時といい、何かあるたびに贈られてくる物たちの数を見ると、ほんとフィサリス家って存在感というか影響力？　そんなのが大きいんだなぁって思い知らされます。

「旦那様もおっしゃっていた通り、お倒れになった場所が悪うございました。王宮の使用人だけな

ら内密にすることもできたでしょうが、それ以外の方に目撃されていたようでございますから」
ロータスが苦笑いしています。
「そっかぁ」
なんであんなところで倒れたんだ私。しかも派手に旦那様に助けられたりなんかしたもんだから……せめて馬車を降りてから、すっ転んだくらいにしておけばよかったものを。
「とにかく、お見舞いのお礼状を書かなくちゃ」
少しでも気分のいい時に済ませちゃいましょうとベッドから起き上がりはするものの、やっぱり眩暈がして倒れ込んでしまいました。
「世界が回るわ」
「無理はしないでくださいませ！」
側に控えていたステラリアが慌てて駆け寄ってきました。
「ステラリアの言う通りでございます。お礼状はこちらで用意させていただきますので、奥様はそのまま、静養を続けて――」
「でもでも……せめてお友達の分は手書きしないと」
それ以外は代筆でもいいけどね！　という謎正義。きちんとお礼状を書かなくちゃという気持ちが焦るほど、比例するかのように気分が悪くなるんだけど。

お見舞いの品が運ばれてくると、焦りで気分が悪くなる。そんなのを続けていると落ち着けなくて、安定どころかますます体調が悪くなっていきました。これって、負のループ？

## 五・静養しましょう

「本当に、お礼なんかは後回しでいいから」
「時間を空けてしまっては失礼だから――」
「体調優先です」
「でもでもっ！」

旦那様やロータスたちに止められても『やらなくちゃ』と勝手に自分を追い込んで焦りを募らせていく日々。
「これはもうお見舞い禁止令を出すしかないか――」
「そうだわ！」
勝手に焦る私を見かねて旦那様がため息をついていると、お義母様がパンっと手を叩きました。
何か企んでいるような、思いついたようなそんな顔をしています。
「ロージアにいるからお見舞いが届いちゃうのよ。遠くに行っちゃえば、みんなもそっとしてくれるわ。今のヴィーちゃんに必要なのは、静かに心と体を休めることよ」
「「はい？」」
お義母様の提案、突拍子もなさすぎて理解できないんですけど？　私が、遠くに行くって？

どこに？　旦那様も理解できていないようでキョトンとしています。しかしそんな中、お義父様はさすがというか、すぐにピンと来たようです。
「ふむ……それはピエドラでしばらく過ごす、ということかな？」
「そういうこと！」
おお、そういうことでしたか。お義母様は、『領地で静養したらいい』ってことが言いたかったんですね。王都から距離を置く。確かに、わざわざ領地までお見舞いを送ってくる方はなかなかいないでしょう。すごくいいアイデアだと思います！
「でもね、ピエドラは町に近いから賑やかじゃない？　私はルクールがいいかなって思ってるの」
「ルクールか。そうだね、あそこなら町から少し離れてるし――」
「何より景色がいい！　どう？　ヴィーちゃん」
ルクールの領地ですか。何気に新婚旅行（？）以来だなぁ。
「ルクールは素敵なところなので、私も大好きな場所なんです。とてもいいと思います！」
海が綺麗なルクールの町。以前の記憶を思い出すだけでワクワクしてきます。
「ピエドラよりもロージアから離れてるし、静かで景色もいい。静養にはもってこいの場所だ」
「でしょう？」
「でも……いいんですか？　お邪魔して」
「邪魔だなんてとんでもない。公爵家の領地は、もはやヴィーちゃんの領地でもあるんだから」
「いやいやいやいや」
まだそこまで思えませんて。というツッコミは心の中だけで。

とにかく、すっかり場の空気は『ヴィーちゃんルクール静養計画』に固まりつつある中、渋い顔をしている人が約一名。

「ヴィーが屋敷からいなくなったら、レティはどうするんですか」

旦那様、バイオレットと言ってはいますが、それたぶん、ご自分のことだと思われます。

「あら、もちろんレティちゃんも一緒に行くに決まってるじゃない」

うふふとイタズラっぽく微笑むお義母様……あ、これは旦那様の気持ちに気付いてますね。

「そりゃ、まあ……そうですね……。あっ！　では、屋敷は誰が管理――」

「それは貴方がすればいいことでしょ。ロータスたちだっているんだし」

「ぐぬぬ……。ではその間、僕はどうすれば？」

「そんなの自分で考えなさいな。貴方仕事があるでしょ？　長期でここを留守にできないでしょ」

「……ハイ」

お義母様最強説再び。旦那様、完全に論破されてしまってぐうの音も出ません。ああ、旦那様。私もバイオレットもいないなんて、寂しくて夜な夜な泣いちゃうんじゃないでしょうか？

「ルクールって、久しぶりでワクワクしちゃいます」

ル・クール・ド・ラ・メール。フィサリス公爵家の海辺の領地。生まれて初めて見た海の素敵な景色を思い出していると、気分が悪かったのもすっかり吹っ飛びました。現金なものです。

「ヴィーはワクワクだろうけど、僕は絶望だよ」
「まあまあ」
お義母様に『自分で考えろ』と言われてしまった旦那様、仕事は休めない、けど私たちとも長期で離れ難いというジレンマで嘆いています。
「いっそルクールから通勤しようか」
「そんな非現実的な」
王都とルクールは一日かかるんですよ。毎日のつもりが隔日になってますよ。
「じゃあ、ユリダリスを代理の副隊長にして――」
「部下に迷惑をかけてはいけません！」
「はぁ……」
まったくコノヒトは……。さすがにこんな旦那様に慣れてしまって、呆れつつも可笑しくなってきちゃってるけど。
「お休みの日に会いにきてくださいな。レティと一緒に待ってます」
「もちろん、そうする。連休もこまめに取るようにする！」
「その時は、町を案内してくださいませね」
前回はわけのわからないまま領地に行って、とっておきの綺麗な場所に連れて行ってもらったけど、肝心の町の様子は見てなかったんでね。あいにくのお天気で、お出かけしない日もあったし。別荘で雨の日お稽古もしたなぁ……これも思い出か。あの時は旅行の途中であまり時間がなかったけど、今回はゆっくり滞在するでしょうから、あちこちを見て回って町のことを知りたいです。な

んとなく覚えているのは、白を基調とした町並みが、青い海に映えてとっても素敵だなぁって思ったことくらい。でもきっと、町の中を自分の足で歩いて見てまわったら、もっと素敵なところだと思うんです。

「デート代わりに町を散策してもいいね。見どころはまだたくさんあるから、すべてをヴィーに見せてあげたいよ。うん、なんかそれを糧に頑張れる気がしてきた」

「よかったです」

旦那様がチョロ……げふげふ、ポジティブな人で。あれ？　私もルクールに行くって決まって気分が上がってるから、二人してチョロい系じゃない？

表向きには『公爵家の領地に赴かないといけない案件が出たので、仕事で忙しい公爵の代わりに夫人が対応する』ということにして、私たちは海辺の領地、ル・クール・ド・ラ・メールに行くことになりました。

今回は長期滞在になりそうなので、本格的に使用人さんも連れて大所帯です。私だけでは決めかねるので、人選はロータスとダリアに相談です。

「誰を連れて行くかを厳選しなくちゃね」

「そうですね。使用人はあちらにもおりますが、慣れた使用人が側にいると安心ですからね。今回は特に」

「うんうん。知らない人ばっかりだと緊張しちゃう」
「すぐに馴染んでそうですけど」
「おやぁ？」
ま、自分でもそう思うけどね！　というのは置いといて。
「身の回りのお世話をする者、料理係も……向こうにいるにはいますが、奥様のお好みを知っている者がいれば安心ですし……」
ダリアが指折り数えています。
「私はこちらに残りますから、向こうでの指示役にダリアをお連れください」
「ロータスは行かないの？」
「旦那様がこちらにおられますからね」
「そうだった」
旦那様がお屋敷にいる限り、すべての中枢はお屋敷です。……忘れがちですが。
「ダリアの留守中、ステラリアに侍女長の代行をお願いしましょう」
「あら、私は奥様とご一緒に行くつもりですが？」
ロータスがステラリアの方を見て言いましたが、ステラリアは残るつもりが一切なかったようで、首を傾げています。
「レティ様があちらに行かれるにあたり、デイジーとミモザも一緒に行くことになります。ミモザがいれば奥様のお世話もできます」
「まあ……そうですね」

少し不満そうなステラリアですが、ほらほら、忘れちゃいけないことあるでしょ？
「長期でお屋敷を空けるんだもの、ステラリアを連れて行っちゃったらユリダリス様に申し訳ないでしょ？」
「……奥様がそうおっしゃるなら」
ベリスのことはいいんか～い、というツッコミは置いといてね！　ステラリアとユリダリス様って、まだ新婚って言ってもいいくらいの時期ですもの、引き離すなんて忍びない。
あとは私専属の侍女さん数名を連れて行くことになりました。
「料理人ですが、カルタムは私同様の理由で残ることになります」
「そうね」
あくまでも、メインはこちらのお屋敷。大事なので二回言います。
「そこで、ティンクトリウスはいかがでしょう？　彼ならカルタムと変わらぬ腕を発揮してくれると思いますよ」
「「心配しかありませんが」」
ロータスの提案に、ダリアとステラリアが同時に声を上げました。綺麗に揃ったなぁ。
「まあまあ。ティンクトリウスなら子どもたちの遊び相手にもなれるし一石二鳥よ」
「そうでございますね。ではレティ様たちの遊び相手ということで」
「違う違う。料理人、時々遊び相手！」
「そういうことにしておきます」

ルクールに行くメンバーも決まって、あとは私の体調を見て出発するばかりになりました。

## 六・領地へ

不思議なもので『ルクールに静養に行く』と決まった途端に調子が上がってきました。我ながら単純だけど、ワクワクするものは仕方ないですよね。

着々と準備を進める中、王宮で料理人として働いているティンクトリウスも帰ってきました。ロージアに帰ってきたあとは王宮の料理人として定着（定住？）して、順風満帆（じゅんぷうまんぱん）なはずでした。そういや人選会議してた時、当然のようにティンクトリウスの名前が上がったことは不思議に思ってたんですよね。なのであのあと、勝手にこっちで連れて行くと決めてしまって申し訳なかったなぁと思ってダリアに確認してみたら。

「それは大丈夫でございますわ。なにせティンクトリウスの方が『そろそろ辞めたい。お屋敷で働きたい』と言ってきていたところなので。ティンクトリウスにしてみればむしろ『渡りに船』ですよ」

「あら」

「お屋敷がダメならまたどこか修行の旅に出ようか、なんて寝言（ねごと）も申しておりまして」

「あら」

だからそのまま決定になったんですね。どうりで『王宮での仕事はどうなる』的な発言がなかっ

たわけだ。なるほど理解。

王都からルクールに直接行くのはまるっと一日かかってしまうので、いったんピエドラに寄って体を休めてから向かうことになりました。旦那様、義父母様たちと一緒に王都を出て、ピエドラで義父母様たちと別れ、ルクールに向かう形です。時間はたっぷりあるので、子どもたちや私の体調を見ながら進むことにしました。

「荷物も人もたくさんだから、馬車の数がすごいことになりそう」

部屋に積まれた旅行カバンの数だけでも大変なことになってます。さらにその上バイオレットの荷物でしょ、たまにくる（たぶん）旦那様用の荷物でしょ、それに、一緒に来てくれる使用人さんたちの荷物――これだけでもどえらい数じゃない？　そして私たちが乗る馬車……ってなったら、いったいどれくらいの馬車が必要なんでしょう？

「荷物は先に送りますよ。馬車の行列が仰々しくなると目立ちますから」

「そ、そっか」

すごい数の馬車が王都の中を移動したら、注目度もすごいし、ご迷惑になりますもんね。後日、ロータスが言うように、荷物はこっそり夜陰に紛れて領地に送られました。ティンクトリウスが『先遣』と称して荷物と一緒に送られてるのには、ちょっと笑っちゃった。

そしていよいよ出発の日。旦那様と私、義父母様とバイオレット、そして使用人さんたちが分乗した馬車が数台。護衛の騎士さんたちに守られて、静かにお屋敷をあとにしました。しばらく王都ともお別れです。

途中休憩を挟みつつ、問題もなくスムーズにピエドラに到着しました。しばらく滞在するかどうか悩みましたが、体調のいいうちに進みたいという私のお願いが聞き入れられたので、そのままルクールに向かうことになりました。

「向こうにも使用人はいるから、何かあれば相談しなさい」

「ありがとうございます」

「困ったことがあればすぐに駆けつけるから、遠慮なく言ってね」

「ア……アリガトウゴザイマス」

さすがにお義母様たちを呼びつけるなんてできないと思います。

そしていよいよルクールへ。

海が近い町だからか、少しずつ風の香りが変わってきたように思います。窓から見える景色も、ピエドラは全体的に赤いかわいらしいイメージだったのが、白を基調とした爽(さわ)やかな感じに変わってきました。ぼんやりと『青（海）』と『白（町）』しか覚えてなかったけど、こんな感じだったなぁって、鮮明に蘇(よみがえ)ってきました。

「前回ここに来た時は、ほんとに慌ただしかったですよね」
訳のわからないまま来てあっちこっちとお出かけし、町の散策もしたけどあんまり記憶に残ってない……。思えばもったいないことしたなぁ。
「そうだったね。僕も、見せたいところだけ凝縮して案内したし」
「どこも素敵なところでしたよ！」
そうそう、海の水が青く輝く神秘的な洞窟なんて最高の景色でした。また行きたいけど、さすがに今は無理ですよね。別荘の大きな窓から見る夕日や露台（バルコニー）からの景色で我慢しておきましょう。
「今回は遠出ができないけど、町の中や近くを案内しよう。僕がいる時に連れて行ってあげる」
「わぁ！　楽しみです！」
旦那様は私と一緒に長期休暇――というわけにはいかないので（お義母様にも言われてたしね！）、お休みをまとめてもらう代わりに連勤するということで話をつけてきました。旦那様曰（いわ）く『十日お仕事して、三日ほどお休みをもらう』感じらしいです。知らんけど。
「海の近くに市場もあるよ。王都と違って新鮮な魚介がたくさん見れる」
「市場！　魚介‼」
「ははは っ！　ほんとにヴィーは市場とかそういうところが好きだね」
「好きすぎます‼」
庶民感覚を忘れてしまったら私のアイデンティティが崩壊すると思ってますが何か？　――というのは置いといて。市場なんて楽しいに決まってるじゃないですか。それも新鮮な魚介ですよ？　王都ではあまり見かけないものですよ？　ウキウキしないわけがないでしょ。王都から海はあまり

近くないせいもあって、魚介類はほぼ、加工されたものしか手に入らないんだから！　あ、ごめんなさい。これは庶民の話で（むしろ私も以前はそっち側）。お貴族様はまあ、なんだかんだして新鮮な魚介を手に入れているけど。

「ま、それも体調が落ち着いてからね」

「全力で落ち着かせます！」

つわりで伏せってる場合じゃなくなりました。

「僕だけ帰らないといけないなんて……こんな残酷なことがあっていいのか？」

「ソウデスネ」

「やはり誰か僕の代理を――」

「それはもうすでに却下しましたよね？」

「ううう……」

旦那様の帰り際。もはやこれをやらなくちゃ帰れない病気かなんかですね。私を抱きしめ駄々をこねる旦那様にはもう慣れっこだけど、嬉しい気もしてる私はすっかり毒されてきてると思います。

「次のお休みなんてすぐにきますよ。私もレティも、楽しみに待ってます」

「そうか……そうだよな」

「そうそう！　頑張るお父様はかっこいい！　素敵！　世界一！」

「よ〜し、休みをもっと長くしてもらえるように頑張るよ！」
よかった。ノってくれました。その勢いのままに、旦那様を送り出しました。

「ふぅ……」
「お疲れ様でございました。旦那様のお見送りもひと苦労ですね」
「もう慣れましたよ〜」
苦笑いするダリアからお茶を淹れてもらい、ようやく一息入れることができました。
ロージアのお屋敷のような豪華さはないけど、座り心地のいいソファ、落ち着くインテリア。少し実家に似た雰囲気のこの別荘が、しばらくは私のおうちです。旦那様がいないのはちょっと寂しいけど、これも慣れなくちゃね——ん？　おっと、これはもう慣れてるか。

別荘に着いて慣れるまでは、お出かけすることもなく、ゆっくりと過ごすことにしました。時間はたっぷりあるので、まずは体調優先ということでね。

「おにしゃん、こちら〜」
「待て待て〜！」
「「キャハハハハハ！」」

バイオレットとデイジー、そしてティンクトリウスがお庭で鬼ごっこをしてます。ティンクトリウスは仕事の時間以外、ほんとに子どもたちとよく遊んでくれています。ダリアたちは『全然こっちにきてよかった』って声を揃えてたけど、それはティンクトリウスの本心なのか、本人に確認したわけじゃなかったのでちょっと心配しているところなんですよね。なので、ちょうどいい機会だからティンクトリウスを捕まえて聞いてみることにしました。

「本当に王宮のお仕事辞めてよかったの？」

今さらな質問だけど。

「はいっ！　だって、王宮にいても学ぶことなくなっちゃったし、そろそろ違う刺激が欲しいなぁって思ってたところだったんです」

えへへ～と無邪気に笑ってますが、そんなに長く働いていないはず。学ぶことがなくなったって……、この人『天才』か『堪え性ない』かのどっちかなの？

「でも、王都のお屋敷じゃないけど大丈夫だった？」

「もっちろんです！　レティ様とデイジーと一緒ならどこまでも～！」

ペッカペカの笑顔で言われたら、もうなんも言えないね。